

難波渦

2008.2
No.8

題字 浅野鈴秀氏(日本書芸院一科審査員)

「豊臣期大坂図屏風」をめぐる国際シンポジウム

2007年9月28日(土)
・29日(日)

前号の本誌で紹介したように、2007年6月に、なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、オーストリアのシュタイヤマルク州立博物館ヨアネウムおよび大阪城天守閣との間で、「豊臣期大坂図屏風」をめぐる共同研究の協定を結んだ。この協定にもとづいて、2007年9月28日・29日に、屏風をめぐる国際シンポジウムを開催した。

「豊臣期大坂図屏風」は、オーストリア第二の都市で、世界文化遺産にも指定されているグラーツ市のエッゲンベルク城内「日本の間」の壁面を飾っているものである。2006年に、州立博物館ヨアネウム総監督ペーター・パケシュ氏とエッゲンベルク城博物館主任学芸員バーバラ・カイザー氏の調査依頼を受けたドイツ・ケルン大学東洋学部教授フランチスカ・エームケ氏が、関西大学文学部の招聘研究者として来学した際に、この屏風を紹介し、2006年10月18日付の朝日新聞一面に掲載され、国内外で広く知られるようになった。今回のシンポジウムでは、パケシュ氏・カイザー氏・エームケ氏をお招きし、二日間にわたって、熱い議論が交わされた。両日ともに、関西大学外国語教育研究機構教授杉谷真佐子氏の通訳によって、円滑に議論が進められた。

国際シンポジウム

新発見「豊臣期大坂図屏風」の魅力 —オーストリア・グラーツの古城と日本—

2007年9月28日

関西大学尚文館マルチメディア AV 大ホール

基調講演：ペーター・パケシュ氏

バーバラ・カイザー氏

フランチスカ・エームケ氏

パネルディスカッション：

朝治啓三氏(関西大学文学部教授)

長谷洋一氏(関西大学文学部教授・センター研究員)

黒田一充氏(関西大学文学部教授・センター研究員)



28日 全体討論

通訳：杉谷真佐子氏

コーディネーター：藪田 貫

(関西大学文学部教授・センター総括プロジェクトリーダー)

第一日目は、関西大学文学部との共催で、学内において、ヨーロッパと日本との交流史に焦点を当てて議論が進められた。

基調講演では、パケシュ氏がグラーツ市や州立博物館ヨアネウムを紹介し、カイザー氏が、この屏風がいつごろエッゲンベルク城にもたらされたのかについての自説を披露された。最後に、エームケ氏は、屏風に、豊臣秀吉・淀殿・秀頼が描かれているとみて、この屏風の制作を依頼した人物を推定した。

つづく、パネルディスカッションでは、朝治氏が、オランダ東インド会社を通じた当時の日欧間の物の交流を、長谷氏が、屏風に描かれた堺の光景から、黒田氏が、屏風に描かれた住吉大社の祭礼の様子から、それぞれ屏風の制作年代をコメントした後、全体討論となった。討論では、当時の日欧関係からみた屏風の位置づけや、制作年代について議論が深められた。制作年代については、17世紀初頭とみる説と、17世紀中期以降とする説とに意見が分かれ、白熱したものとなった。



ペーター・パケシュ氏



朝治啓三氏



黒田一充氏



長谷洋一氏

朝日・大学パートナーズシンポジウム 新発見「豊臣期大坂図屏風」を読む

2007年9月29日

大阪産業創造館イベントホール

特別報告：ペーター・パケシュ氏

基調講演：フランチスカ・エームケ氏

パネルディスカッション：

バーバラ・カイザー氏

狩野博幸氏（同志社大学文化情報学部教授）

北川 央氏（大阪城天守閣研究副主幹・センター研究員）

通訳：杉谷真佐子氏

コーディネーター：

高橋隆博（関西大学文学部教授・センター長）

第二日目は、サントリー文化財団からの研究助成の一環として、朝日新聞社との共催で、大阪市中央区の大阪産業創造館において開催された。テーマとしては、屏風のディーテールを読み解いていくことに重点が置かれた。パケシュ氏の特別報告とエームケ氏の基調講演の後、八曲一隻に仕立てられた屏風の複製品を舞台に上げて、全体討論となった。はじめに、カイザー氏・狩野氏・北川氏による屏風に対する第一印象についてのプレゼンテーションがあり、屏風の形状と図様や景観年代、制作



29日 全体討論



年代などが議論された。聚楽第・方広寺など秀吉ゆかりの京都の光景が描かれた屏風が対として存在した可能性や、制作年代については、前日と同様、17世紀初頭と中期以降の説が示された。最後に、フロアからパケシュ氏・大阪城天守閣館長松尾信裕氏が、この屏風に対する今後の取り組みについて、それぞれの計画が披露されて終了となった。

両日とも、会場は満員の盛況であり、「豊臣期大坂図屏風」の関心の高さがうかがえた。また、聴衆はほとんど終演まで退席することなく、屏風解説のために作成したリーフレットを片手に熱心に議論に耳を傾けていた。パネラーだけではなく、聴衆も一緒になってつくりあげた、まさに“ライブ”のようなシンポジウムであった。そうした双方の熱意が渾然一体となって議論の奥行きが深められ、今後の課題とすべきテーマがさまざまに投げかけられた。

今回のシンポジウム開催にあたっては、10時間以上のフライトを経て来日された海外のパネラーはもちろんのこと、大阪市ゆとりとみどり振興局・朝日新聞社などさまざまな機関のご協力を得た。ご協力いただいたすべての方がたに、この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

なお、シンポジウムについては、今夏、センターより報告書を刊行する予定である。

(P.D. 櫻木 潤)



屏風展示風景



フランチスカ・エームケ氏



バーバラ・カイザー氏



狩野博幸氏



北川央氏

第4回文化遺産学フォーラム 「なにわ・大阪の文化力」

—大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—

古来より大阪の地には、人びとが大切に守り、受け継いできた文化遺産が豊かに遺されている。これは大阪の土壌や人びとが育んできた文化力、いわば「なにわ・大阪の文化力」によるものと言っても過言ではないだろう。

第4回文化遺産学フォーラムは、第1部では能勢人形浄瑠璃公演、第2部ではシンポジウムという異なるアプローチから「なにわ・大阪の文化力」を感じ、大阪の魅力を再発見する機会を得た。270名を数える参加者からは笑いや涙がこぼれ、情感豊かな晩秋のひとつときとなった。

第1部 能勢人形浄瑠璃 鹿角座公演

浄瑠璃を地域に残る文化として守り、その伝統を受け継いで活動している大阪府能勢町の能勢人形浄瑠璃鹿角座を招き、人形浄瑠璃の公演をおこなった。

江戸時代、浄瑠璃は庶民の娯楽として流行し、大坂のような都市だけでなく農村部にも広まったが、摂津国北部の能勢にも文化年間頃(1804～18年)に伝えられた。その芸は「おやじ」制度と呼ばれる能勢特有の後継者育成制度によって支えられてきたが、現在でも200名を超える語り手が存在していることから、能勢が伝統を受け継いで浄瑠璃に親しんできた土地であることがわかるだろう。

ところが、能勢の浄瑠璃は太棹三味線と太夫の語りによって物語が進行する「素浄瑠璃」といわれる形態が基本となっており、今回上演された「人形浄瑠璃」の形をとるのはごく近年のことなのである。平成10年、浄瑠璃を地域の財産として守り、さらに次世代へと発展させるため、これまでの「素浄瑠璃」に人形と囃子を加えた「ザ・能勢人形浄瑠璃」がデビューした。また、平成18

年には、能勢町制施行50周年を機に、名称を新たに「能勢人形浄瑠璃鹿角座」と改称し、その活動は全国からも注目されている。

さてフォーラム当日、会場となった新関西大学会館北棟ホールには、太夫が浄瑠璃を語る床をはじめ、化粧櫃や大道具が設置され人形浄瑠璃上演の雰囲気を整えた。

鹿角座からは16名の座員が出演し、「能勢三番叟」と「傾城阿波の鳴門—巡礼歌の段—」を上演した。演目の幕間には、鹿角座の座員による丁寧な解説で、人形の構造や、人形遣いの役割などが紹介された。

「能勢三番叟」では男女ペアの人形が登場して舞を披露した。この演目は能勢オリジナルの作品で、歌詞には町のシンボルである野間の大ケヤキやササユリをはじめ祭りや名所・名物などがおりこまれており、能勢の豊かな自然と文化が感じられた。

また「傾城阿波の鳴門—巡礼歌の段—」は、主君のために盗賊となった阿波十郎兵衛を夫にもつお弓が、両親を探して西国巡礼に出た娘おつるを、わが子とは知りながら名乗らずに別れる場面が有名である。当日は、太夫の熱のこもった語り口と、お弓の子を思う気持ち、おつるのあどけない姿を前にして、会場からすすり泣きの声が聞こえた。



「傾城阿波の鳴門」お弓とおつる



人形の所作体験



能勢三番叟

演目終了後には、会場内の参加者から3名が登壇し、実際に人形の実演を体験した。人形浄瑠璃の人形は、頭と右手を担当する主遣い、左手遣いと足遣いの三人遣いで一体を動かすため、それぞれの息があわないとギクシャクした動きになってしまう。登壇した3名も右手と左手を合わせ、足拍子を踏む所作に挑戦したが、タイミングを合わせることに苦勞する様子が見られた。

観客の涙を誘うほどの芸を修得し、舞台にあがるには大変な稽古を積まなければならない。それだけに、鹿角座員の日頃の取り組みがうかがえるすばらしいものであり、人形浄瑠璃に携わることで、地域の伝統文化の継承に笑顔で参加している姿が印象的であった。

第2部 シンポジウム

基調講演：江戸文化の中の「なにわ」

中野 三敏氏（九州大学名誉教授）

パネルディスカッション

井上 宏氏（(社)生活文化研究所・「上方研究会」代表）

近江 晴子氏（大阪天満宮文化研究所研究員）

酒井 一氏（大塩事件研究会会長）

水田 紀久氏（木村兼葎堂顕彰会代表）

高橋 隆博（なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

コーディネーター

藪田 貫

（なにわ・大阪文化遺産学研究センター 総括プロジェクトリーダー）

基調講演は、江戸文化に大きな影響を与えた「なにわ」の文化力について再認識する機会となった。

江戸時代の文化では、17世紀に上方で元禄文化、19世紀には江戸で化政文化がピークを迎え、その間の18世紀は文化の情勢が上方から江戸へ移っていく過渡期であると考えられている。これに対して中野氏は、18世紀は上方と江戸の文化がうまく融合し、最も文化が成熟した時期であると主張した。そしてこの時期の文化を形成した根幹の部分を支えた存在と考えられる一人の書肆、丹波屋理兵衛の活動について紹介した。



中野三敏氏



パネルディスカッション

丹波屋理兵衛は18世紀に大坂、その後江戸で活躍した書肆であったが、『万象千字文』という篆書の字典や、洒落本を執筆するなど多才な人物であった。特に洒落本に関しては、寛保2（1742）年に大坂で出版された『嶗陽英華』と、江戸における本格的な洒落本の萌芽と位置づけられている多田翁作『遊子方言』を例に挙げ、多田翁が丹波屋理兵衛と比定できることから、丹波屋理兵衛が『遊子方言』を執筆したと考証した。さらにいずれの序文も全く同じ文章であることから『嶗陽英華』も執筆した可能性を示唆した。丹波屋理兵衛は洒落本の上方での熟成と江戸での大流行を支えた存在と位置づけられ、18世紀には丹波屋理兵衛のような才能豊かな人物が数多く存在したことによって、成熟した文化が華開いたと述べた。

パネルディスカッションでは、中野氏と大阪の文化について長年研究をされてこられた研究者が「なにわ・大阪の文化力」について語り合った。現代の上方文化は語りの文化が廃れ、通俗的なお笑いの世界だけが強調されているが決してそれだけではない、雅と俗の文化が見事に融合し、洗練された言語遊戯や文化レベルの高さに裏打ちされた大人の文化であったことが明らかになった。

このシンポジウムを通じて、「なにわ・大阪の文化力」の本来の力を知り、上方文化に対して誇りを持った。それとともに、将来上方文化が「なにわ・大阪の文化力」を存分に発揮し、再び成熟していくために、次の世代に遺すべきものは何なのか考え続けなければならないと痛感した。

（祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内海 寧子）

（学芸遺産研究プロジェクト R.A. 松本 望）

第4回文化遺産学フォーラム関連行事

企画展「なにわ・大阪の文化力 —大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—」

2007年11月24日(土)～12月1日(土)

会場：関西大学博物館第二展示室

第4回文化遺産学フォーラムの関連行事として、平成19年11月24日(土)から同年12月1日(土)まで、企画展「なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る—」が開催された。主な展示品は、「本山コレクション金石文拓本」、「津田秀夫文庫文書」、「牧村史陽氏旧蔵写真」である。当センターにとって、博物館での展示は初めての試みであった。

「本山コレクション金石文拓本」コーナーでは、元大阪毎日新聞社社長の本山彦一氏(1853～1932)が収集したコレクションのうち、『大日本金石史』の著者で大阪の郷土史家木崎愛吉氏(1865～1944)ゆかりの金石文拓本や、「富民協会農業博物館本山考古資料室目録」など、本山彦一氏自身に関わる資料を展示した。「津田秀夫文庫古文書」コーナーでは、元関西大学教授の津田秀夫先生(1918～1992)が、長年にわたって収集した古文書のうち、「平野含翠堂・土橋家文書」の古文書を中心に、書籍、絵図などを紹介し、加えて、大阪市史編纂所所蔵の津田先生ゆかりの資料も展示した。「牧村史陽氏旧蔵写真」コーナーでは、大阪の郷土史家で昭和53年に大阪文化賞を受賞した牧村史陽氏(1898～1979)が撮影した写真資料や、同氏が収集したマッチ箱のレットルなどを展示した。今回、展示した資料の多くは、初公開であった。

企画展の関連行事として、11月29日(木)に、パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」を開催した。津田先生の東京教育大学時代の教え子で、金沢大学教授・同附属高等学校長の奥田晴樹氏、京都大学准教授で津田先生の関西大学時代の教え子の岩城卓二氏に、それぞれご講演いただいた。続いて、パネルディスカッションでは、奥田氏と岩城氏に加えて、津田先生の最晩年の教え子である、関西大学非常勤講師の常松隆嗣



展示会場の様子

氏と、コーディネーターとして藪田貫総括プロジェクトリーダーも加わって、津田先生のお人柄や歴史学について、ディスカッションが交わされた。

なお、企画展の入館者数は297名、パネルディスカッションの参加人数は52名であった。今回の企画展およびパネルディスカッションの記録は、Occasional Paperとして刊行する予定である。

※今回の企画展を開催するにあたって、多くの方がたのご協力を得ました。厚く御礼申し上げます。
(歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和)



当センター研究員による展示解説



パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」

地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」

2007年10月28日(日)

会場：大阪市平野区平野本町

地域連携企画は、地域にある文化遺産を地域に住む方々に知ってもらうという、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの理念が端的にあらわられた研究行事である。その第三弾として、昨年10月28日に平野区全興寺境内にて地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」を開催した。これは「平野の町づくりを考える会」が主催する「町ぐるみ博物館」に参加する形で行われたもの

で、河内木綿の歴史や綿花ができるまでを解説したパネルや河内木綿を含めた木綿製品の展示とともに、綿くりや糸紡ぎ、染色などを体験できるコーナーを「もめん博物館」として設置した。平野郷といえば環濠集落や含翠堂で有名だが、河内木綿の一大集散地でもあり、その名残は屋号などにも残されている。

本行事には企画段階からインターンシップ生の岩下夕岐子さん（工学部4回生）、田中美帆さん（総合情報学部3回生）を加え、実際に意見を出してもらいながら進めた。

今回、メインターゲットとしたのは「子供たち」。理想を言えば、両親や祖父母と一緒に来た子供である。これは次世代に文化遺産を継承する者を育てなければならないという観点からの選択で、そのため解説パネルを平易な文章でまとめるなど、とっつきやすさを前面に出すようにした。同じ理由で、糸紡ぎには繊維が長く紡ぎやすい米綿（アメリカ産の綿花）を使った。綿くりには河内木綿の実綿を使ったが、繊維が短い河内木綿を紡ぐのは難しく、子供たちが楽しめない、つまり興味を持ってないだろうと考えたからである。染色体験では、木綿のハンカチと赤・青・黄の三色の染料を用意して、絞り染めを体験してもらった。綿くりや糸紡ぎを体験したのは大半が子供たちだったが、染色は老若男女を問わず、興味を引いたようだった。来館者数は240名、うち78名が何らかの体験に参加してくれた。これは、こちらの予想を上回る数で、運営側はうれしい悲鳴を上げることになった。ターゲットにしていた子供たちも大勢来てくれ、企画の目的はほぼ達成できただろう。

平野区には「綿の会」という積極的な活動を行っている団体があり、綿くりや糸紡ぎの体験はこれまでに何度も行われている。そのため、我々の企画した「もめん博物館」は決して目新しいものではなく、「いまさら何故センターが」という声があるのも事実である。しかしながら、文化遺産というものは一度見ただけで浸透するという性質のものだけではない。何度も目にすることによって自分の住んでいる町に在るものを再発見し、納得

し、好きになっていく。そしてこれが郷土に対する愛着を育て、ひいては地域の文化遺産を守る原動力になる。「もめん博物館 in 平野」はそれを確信できる、いい機会となった。

※境内を貸していただいた全興寺の川口住職をはじめ、「平野の町づくりを考える会」の皆様には厚く御礼申し上げます。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 宮元 正博
影山 陽子）



染色体験コーナー



糸紡ぎ体験コーナー



平野区・全興寺境内で催された「もめん博物館」



綿くり体験コーナー

2007年9月14日(金)、なにわ・大阪文化遺産学
研究センター1階、文化遺産実習・展示室で、第2回「豊
臣期大坂図屏風」研究会が行われた。今回の研究会は、
9月28日に催される国際シンポジウムを前に、参加パ
ネリストの打ち合わせを目的として、屏風の研究成果を
発表するものであった。

長谷洋一氏(関西大学教授・当センター研究員)は、
屏風に描かれた堺の町と、他の絵画に見られる堺の町
とを比較検討し、屏風に描かれた堺の町の景観年代を
推測する発表を行った。黒田一充氏(関西大学教授・
当センター研究員)は、屏風に描かれる住吉大社の
荒和大祓神事の行列に関する考察を発表した。黒田氏
あらにこのおほはらしんじ
は、屏風に描かれる祭礼行列には、京都の祇園祭を描い
た作例と共通する表現がみられることを指摘した。内田
吉哉(当センター R.A.)は、屏風に描かれた事物と景観
の特定を目的とする発表を行った。当センターでは、国
際シンポジウムの際に、この研究成果をもとに屏風の解
説リーフレットを作成し、聴講者に配布した。

各発表の終了後、参加者による討論が行われた。北川
央氏(大阪城天守閣研究副主幹・当センター研究員)か
らは、屏風に描かれた事物から得られる情報の有効性と、
その限界についての意見が出された。朝治啓三氏(関西
大学教授)からは、屏風の画風から製作者を推測する意
見が述べられた。本屏風について、当センターでは、高
精細デジタルデータを利用した複製品を制作した。

(祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内田 吉哉)



編集後記

『難波渦』No.8をお届けいたします。今号は、国
際シンポジウム、文化遺産学フォーラムなど、大き
な行事が盛りだくさんの、濃密な8ページになっ
ています。今号に掲載された行事の多くは、後日に
Occasional Paper や報告書等として刊行される予
定です。今回の『難波渦』No.8は、その予告編と
でもいえるでしょうか。昨今、予告編を見る限りで
は、とても面白そうな映画が、実際観てみたら…と
いうことがしばしばあります。そのようなことのない
よう、今後の出版物にも全力を投入してゆくつも
りです。(R.A. 内田 吉哉)

2007年12月22日(木)、関西大学では、長期インター
ンシップ実習報告会が開催された。今年、7つの企業・
団体による受入れがあり、それぞれの実習生が順番に報
告し、各企業・団体の担当者がコメントを付け加えた。

今年度、当センターでは、岩下夕岐子氏(関西大学工
学部・化学工学科4回生)と田中美帆氏(関西大学総
合情報学部・総合情報学科3回生)の計2名のインター
ンシップ生を受入れた。報告ではまず、岩下氏が、長期
インターンシップの志望動機として、自身が工学部に在
籍していることから、自分の進路とは違う学問の世界を
経験し、今後の人生の糧にしたいと話した。続いて、自
らが担当した研究行事・地域連携企画第三弾「もめん博
物館 in 平野」について紹介した。これは、当センター
R.A. 宮元・影山両名の指導のもと、岩下氏と田中氏が中
心となって進めたものであり、「地域社会への研究成果
の還元」という当センターの研究理念に直結する行事で
ある。

長期インターンシップ生のセンターでの受入れ開始か
ら2年目を迎えた今年度は、昨年度の反省点を踏まえて、
研究行事の企画立案から実施まで、インターンシップ生
の自主性を重視した実習となることを目指した。岩下氏
の報告から、今年度はインターンシップ生の実習への主
体的な関わりが強く感じられた。

報告後、コメンテーターからは、アイデアの独自性や
勤務体制、プレゼンテーションの仕方についての厳しい
ご意見をいただいた。当センターのような研究機関は、
他の団体や企業とは異なる社会的役割を担うため、今後
プレゼンテーションの場でそのことをもう少し強調して
いけばよいと思う。実習報告会全体を通じて、実習生へ
の指導が担当者任せになりすぎていたこと、最後のプレ
ゼンテーションも実習の一環なので、その指導を十分に
できていなかったことなど、次年度以降に改善する課題
がみえてきた。(P.D. 森本 幾子)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業(平成17年度~21年度)
なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
News Letter 「難波渦No.8」

発行日 2008年2月29日
発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
発行者 高橋隆博
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm
E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp
印刷所・編集協力 (株) 廣済堂